

〈論文〉

アルゼンチンにおける 「第三世界のための司祭運動」

—近代世界における聖職者の自己再構築運動として*—

武田 優子

はじめに

「第三世界のための司祭運動」(El Movimiento de Sacerdotes para el Tercer Mundo, 以下 MSTM、その構成員を STM と表記)とは、1968年5月にアルゼンチンで誕生した、司祭クラスの聖職者によって構成された運動組織である。¹⁾MSTMは、貧しく抑圧された「第三世界」の民衆の現世における解放や社会正義の実現を訴え、人々の軍事政権(1966~1973)への不満を吸収するという一定の社会的影響力を発揮した。反面、時の軍政やそれに近い教会中枢とは対立を深めた。そして、1973年の民政移管の選挙を経てペロニスタ政権が樹立されると、運動体としての活力を失っていった。MSTMについては、このような理解が一般的である。²⁾

わずか5年余の活動期間しかなかったMSTMだが³⁾、当時のアルゼンチンで社会的影響力を獲得しえた背景には、軍政による近代化政策の断行により、低所得層が一層の周縁化を余儀なくされていたという、当時の社会経済的状況があった。例えば、当時の首都ブエノスアイレスやその周辺では、年率8.4%のペースでスラム地域が拡大していた(Auyero 2003:233)。また、1955年軍政以降の脱ペロニスモ化の強制や1966年軍政による政治的参加の回路の閉鎖により、一般市民の不満が増大していたという政治的な背景もある(cf. Romero 2001:169-175)。

しかし、1960～70年代のアルゼンチンが、同時期のブラジルと同様、先進諸国をしのぐ勢いで経済発展を遂げ、中所得層を拡大させていたのも事実である（Aroskind 2003 : 89-90 ; Gerchunoff y Llach 1998 : 309-312）。新しい消費文化が到来した当時の首都ブエノスアイレスは、物質的豊かさを象徴する空間へと変貌していた（cf. Podalsky 2004）。そのような社会的変化は物質的次元にとどまらなかった。避妊ピルの流通が示すように、そこには伝統的規範の急速な崩壊が付随していたのである（Pujol 2003 : 297-299）。実際、1966年にブエノスアイレス州で行われた聖職者の会合では、そうした現代社会の諸問題が指摘されていた。彼らが危惧したのは、物質主義、モラルの低下、利己主義の横行、共同性の崩壊などの社会現象が、都市のみならず農村にまで及びつつある点だった（Gera et al. 1967 : 43-56）。それは、安定した経済成長を背景に一定の近代化を達成した社会にしばしば見られる「病理」として、聖職者の目に映じていたといえるだろう。

では、既にある程度の近代化を達成していた1960年代後半のアルゼンチンにおいて、なぜ一群の司祭たちはアルゼンチンの「第三世界性」を問題とし、政治意識を高めていったのだろうか。そして、そのような彼らの言動は、なぜ大きな社会的影響力を獲得することができたのだろうか。

世俗化が進行していた当時のアルゼンチンにおいて、一部の司祭らはふたつの相異なる価値の両立に苦慮していた。すなわち、(1)司教区での活動から芽生えた社会改革の意識、そして、(2)教会組織のヒエラルキーの中で与えられた自らの聖職者としての使命・役割に関する内省である。司祭たちは、俗と聖のふたつに分裂した自己像をいかに再統合するかという課題を抱えていたといえるだろう。筆者は、このような問題意識が運動化したものがMSTMだったと捉えている。すなわち、MSTMは、カトリック教会という伝統的組織の聖職者集団（聖）として、世俗化の進む現代世界（俗）におけるその使命の模索に端を発した運動だったのではないか。そのなかで、MSTMが「第三世界」全般の問題を自らの問題として引き受

けたのは、聖俗の葛藤を解きほぐす、現代世界における聖職者としての役割遂行の意義をそこに見出したからではないのか。そして、ペロニスモの台頭と相前後して葛藤に立ち向かうエネルギーが失われていったのは、5年の試行錯誤のなかで、ふたつの自己像の再統合に失敗し、組織的な分裂が生じたからではないのか。

これらの仮説を具体的に検証する一次資料として筆者が注目するのは、MSTMの機関誌『エンラセ』(*Enlace*)⁴⁾である。本稿では、その分析を通じ、教会という伝統的制度と現代アルゼンチン社会の狭間で、MSTMがいに政治化を遂げたかを解明したい。本稿では、上記の(1)、すなわち社会改革志向については概略を述べるにとどめ、その実践過程で表に出ることの少ない(2)、すなわち現代世界における聖職者の役割に関する自己省察に注目する。それは、彼らの使命感にかかわる「預言者」としての自省である。その分析は、言葉の政治学に向かった結果生じたMSTMの限界をも明らかにすることだろう。当時の司祭らが抱えていた葛藤やその調整の努力が何であったかを見据えてこそ、MSTMの宗教的な言説が社会的影響力を獲得しえた理由、それが失われていった経緯、そしてその今日的意義が明らかになると筆者は考えている。

I 社会改革者としてのカトリック聖職者

MSTM誕生に先立つ時代については、これまで「労働司祭」(*curas obreros*)の経験や「スラム司祭」(*curas villeros*)の活動が挙げられてきた(Brieger 1991: 13-15; Pontoriero 1991: 9-10; Seisdedos 1999: 45-47; cf. Bellota 1997)。前者は、1950年代から始まった、聖職者が労働者や貧しい人々と一緒に働き寝食を共にする活動である。后者は、首都ブエノスアイレスなど大都市で拡大しつつあったスラムでの慈善活動を通じ、聖職者が貧しい人々の生活世界に接触を図ろうとした活動だった。これらの経験の蓄積から、現場の聖職者は、社会問題への問題意識を研ぎ澄ましていったと考えられる。

しかし、MSTM 誕生以前のアルゼンチンには、もうひとつ、見逃すことのできない聖職者たちの新しい動きがあった。それは、第二バチカン公会議後に活発化した司祭クラスの聖職者間の交流である。教区横断的な新しい交流は、特に進歩派司祭らの意見交換の場の形成をもたらした。そこでは、バチカン公会議によって打ち出されたカトリック教会の現代化 (aggiornamento) の路線に沿った司牧活動、祭儀、信仰教育、神学的刷新、現代世界における教会の位置付け、世俗化する社会における聖職者の役割などのテーマが掘り下げられていった。MSTM の誕生は、聖職者間の交流が最も活発化した時期と一致している (Martín 1992 : 17-26 ; cf. Gera et al. 1967 ; Segundo et al. 1969)。

1967年8月にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの司教18名が、『第三世界の18人の司教のメッセージ』⁵⁾ (“Mensaje de 18 obispos del Tercer Mundo”, 15 de agosto de 1967, en Bresci 1994 : 23-33) という文書を公にした。そのなかで司教団は、貧困や不平等が加速化する「第三世界」地域では、キリスト教徒が現状変革に積極的に関与することが必要であり、それこそがキリスト教徒の新たな使命であると述べた。すべての人間の根源的平等というキリスト教的理念に立ち戻ろうと訴えるそのメッセージは、世俗権力と癒着する「第三世界」の教会を批判するものでもあった。

この文書の影響は、すぐにアルゼンチンにも及んだ。『メッセージ』に共鳴したミゲル・ラモンデッティ (Miguel Ramondetti)、サンティアゴ・オフアレル (Santiago O'Farrel)、アンドレス・ランソン (Andrés Lanson) らブエノスアイレスの司祭グループが、ブエノスアイレス州アベジャネーダ市から1967年11月20日付けで、『メッセージ』のコピーと『メッセージ』への連帯を表明する署名を求める手紙を全土の司祭たちに発信したのである。⁶⁾この呼びかけに対する反応は強く、わずか1ヶ月の間に270筆の署名が全国から集まり、ほどなく400筆に達した。近代化が生み出した貧困問題や不平等問題の改善を要求する『メッセージ』やラモンデッティ司祭らの呼びかけに、「労働司祭」や「スラム司祭」がいち早く

共鳴したことは想像に難くない。

発起人の一人ラモンデッティ司祭は、予想外の大反響を得て、署名司祭の集会を企画した。そして、アルゼンチン教会史上初の全国規模での司祭アソシエーション「第三世界派司祭団」(Grupo Tercer Mundo)の第1回全国大会が、1968年5月1～2日にコルドバ市で開かれた。「第三世界派」の動向は、新聞や雑誌などでは「第三世界の司祭運動」(El Movimiento de Sacerdotes del Tercer Mundo; Curas del Tercer Mundo; Tercermundistas [イタリックは筆者])として報じられた。「第三世界派」はこの名称をしばらくの間採用するが、運動の性格をより正確に反映する名称として、のちに「第三世界のための司祭運動」(El Movimiento de Sacerdotes para el Tercer Mundo [同])、を採用することとした。

II 自己省察者としてのカトリック聖職者

MSTM 誕生の背景には、聖職者の社会問題への関心や新しいアソシエーションの形成があっただけではない。聖職者自身の自己省察がその背後に潜んでいたことを筆者は重視したい。それは、もはや宗教が社会的価値規範を主導できなくなった現代世界においては、聖職者の存在意義の模索こそ、聖職者と社会を結ぶ理念の再構築として重要だったからである。

例えば、1965年に行われたブエノスアイレス州における教区横断的な聖職者たちの会合で、彼らは次のような苦悩を訴えていた。「教会の現状は現代世界に対応していない。特にそれは、ふたつの交わることのない世界—聖職者の世界と人々の生きる世界—の分断を前提に、教会が成立している点に起因している。[中略] ひとり人間として聖職者が使命をまっとうするためには、新しい事物[現代世界]が存在していること、そして、そのなかに我々が『今在る』のだということ、この二つの事実を踏まえるべきである。そう考えるべきとの衝動を、我々はもはや抑えることができない」(Segundo et al. 1969: 102-103)。

ここに表明されているのは、世俗化が進む社会にどのように自己を位置

づければ聖職者として、また個人として自己実現が図れるのかという問いといえるだろう。世俗化が進む現代社会においては、以前のように教会内部の問題や人々の精神世界にのみ関わっていたのでは、聖職者は社会的存在意義を失うであろうという危機感が、この文章にはあふれている。

1966年にブエノスアイレス州で行われた聖職者の集会では、現代世界における聖職者の役割が話し合われた。現代アルゼンチン社会には物質主義、モラルの低下、刹那主義の横行、共同性の崩壊など諸問題が存在するが、聖職者はそこでいかに自分の役割を發揮しうるのが、集会の中心テーマだった (Gera et al. 1967: 43-56)。こうした会合では、多分に理念的ではあるが、福音を現代世界の脈絡に位置づけることができれば、人々の教会離れは防ぐことが可能であるとの主張がなされ、そこに聖職者の存在意義が求められることが多かった。

これらの会合で「第三世界」における貧困の問題が議題化された形跡はない。『第三世界の司教団のメッセージ』のインパクトは、まさにこの点にあった。それは静的な省察的脈絡を動態化させ、行動する集団 MSTM の出現も促したのだった。

Ⅲ MSTM の「第三世界」問題への関与—司祭たちの自己実現に向けて

『第三世界の司教団のメッセージ』は、アルゼンチンにおける聖職者の様々な社会的活動、教区横断的な交流、聖職者の存在意義をめぐる内省などを統合する力となった。『メッセージ』がそうした力を持ちえたのは、司祭らが、近代化が進む現代アルゼンチン社会における聖職者の使命、ラテンアメリカや「第三世界」の問題への関与に見出していったからである。それは、司祭たちが広義の「第三世界」としてのアルゼンチンという文化的自画像⁷⁾を生産し、「第三世界」として表象されると同時に問題視された社会的現状を、アルゼンチンにも存在する問題であるとして受け止めたことを意味した。

しかし、当時のアルゼンチンは、マクロ経済レベルにおいては他のラテ

ンアメリカ諸国に比べ豊かであるとされていた。⁸⁾実際、MSTMが「第三世界」で解決されねばならないとした諸問題の中には、飢餓や高い非識字率、風土病の蔓延など、アルゼンチンの現実とは必ずしも一致しないものも少なくなかった (*Enlace* 1, septiembre de 1969; *Enlace* 3, enero de 1969)。それは、MSTMが立脚したのがトルーマン・ドクトリンに代表される、「先進国」が問題化した「低開発」や「遅滞」のような「第三世界」表象にすぎなかったからである。それは、「先進国」が創り出した他者表象であり (cf. Escobar 1994)、アルゼンチンの現実観察そのものから出発したものとは必ずしも言えなかったのである。

実際、着実な経済発展を遂げていた「中進国」アルゼンチンにおいて「第三世界のための運動」を推進しようとする司祭たちは、世論の反撃を受け、論争を巻き起こすことになった。例えば軍寄りの司教グループは、「MSTMは、『第三世界』などでは断じてなく発展途上でもない我が国で『人工的』に活動し、『第三世界』というイデオロギーによってマルクス主義を普及させ、国家転覆を目的としている」としてMSTMを批判した。⁹⁾アルゼンチンは「遅れた第三世界」に属してなどいないというのである。

MSTMは「第三世界」をどのように定義づけていたのだろうか。MSTMは、「第三世界」を、貧しい国々の抑圧された人々、豊かな国々で排除され抑圧されている人々 (El pueblo de los pobres y los pobres de los pueblos) から成り、独自の発展を実現するために、「資本主義陣営によって形成される第一世界」および「共産主義陣営によって形成される第二世界」の双方の支配からの解放を望んでいる世界とした (*¿Qué son los sacerdotes del Tercer Mundo?* Sin fecha: 4-5)。このようなMSTMの第三世界論には、何の独創性もない。したがって、MSTMが「第三世界」の低開発や貧困問題の改善など普遍の問題意識にもとづき軍政や当時の開発言説全般に異議申し立てを行ったと捉えてしまうと、逆にその核心を見誤ることになる。MSTMは、明確な綱領や体系だった第三世界思想を提示して

当時のアルゼンチンで社会的影響力を持ったわけではなかったからである。

1972年に出版された『アルゼンチンの現状における政治的傾向と勢力』は、体制転覆を煽る危険な一勢力として MSTM を位置づけている。しかし、著者アントニオ・カスターニョは、「[MSTM は] 現時点まで明確な政治的、社会的、経済的プロジェクトを提示していない。つまり、MSTM 構成員は、誰一人として明確に奥行きを持ったプロジェクトを示してはいないのだ。彼らの活動の大半は漠然とした意見表明であり、一般にそれは経済的状況に関する抗議でしかない」(Castagno 1972:34)として、MSTM の掲げる思想に意義を認めない。

カスターニョは、MSTM を次のような理由で危険視する。「MSTM が体制転覆勢力の陣営に登場したということは、アルゼンチンの政治・社会に重大な問題を間違いなくもたらしている。危機は、彼らが聖職者であるという事実によって日々深刻なものとなるだろう。なぜなら、彼らは聖職者としての使命を遂行すると称し、煽動的で体制転覆的な説教を行い、教区民や民衆を容易に動員することができるからである」(Castagno 1972:35)。すなわち、アルゼンチンに政情不安を引き起こす潜在的要因として MSTM が危険視されたのは、その社会思想によってではなく、彼らが聖職者という立場から発する声の人々への影響力ゆえだったのである。

MSTM は、当初から自己を聖職者として教会内勢力に位置づけていた。そして、現代世界における貧者の問題の解決への関与を、聖職者としての新たな存在意義と捉えていた。彼ら自身が掲げた方法・目的は、(1)多くの人々が搾取され抑圧されている現状を、当事者を含め、より多くの人々に意識化させること、(2)資本主義の過剰な進捗が引き起こす不平等や不正を告発すること、(3)これらの意識化や告発の効果を高めるために、具体的行動を起こすこと、この3点であった(“Informe de la reunión de coordinadores regionales y secretariado sobre objetivos, organización y marcha del movimiento,” en Bresci 1994:53)。MSTM を MSTM たらしめていたのは、このように、自分たちの「声」と「具体的行動」を通じて多くの人々に

「第三世界」における不平等や不公正を認識させ、STM各自が社会変革へ関与し、聖職者の社会的役割を再定義するという意志だったといえるだろう。

その意思とは、どのようなものだったのだろうか。メンドーサ地方のあるSTMは、『エンラセ』で次のように訴えた。「民衆全体が、特に労働者たちが、現状のシステムによる搾取に苦しめられ、貧窮、無知、差別の被害者となっている。豊かな国アルゼンチンという馬鹿げた自己満足のために、北部、スラム街、農民の犠牲などが覆い隠されようとしている。しかし、それは無駄である。我々はアルゼンチンにおける現状の証人なのであるから」(Enlace 6, julio de 1969)。この例が示すのは、社会的・経済的な弱者に代わり声を発することにより、MSTMが現状の「証人」、すなわち現状の批判者としての「預言者」たらんとする意思である。

「預言者」である以上、MSTMには問題解決に向けた具体的な実践が伴うべきであった。大きな社会的注目を浴びた実践例に、「クリスマスの約束」がある。1968年12月、全土のMSTMが「クリスマスの約束」と称して一斉に集団的抗議を表明したのである。MSTMは、各地で「第三世界」に蔓延する貧困や不公正に対する抗議の断食を敢行し、信者と共に聖書の読書会を開いた。クリスマスイヴのミサをボイコットしたグループもあった。聖職者の集団行動が強い社会的影響力を持つことから、無言の行進・意思表明に訴えたグループもあった。これら一連の「約束」は、クリスマスを単なる習慣的行事としてではなく、特別の意味を持つ日とするためにMSTMが選んだ実践であった。これは、アルゼンチン全土のSTMが同じ目的のもとに、クリスマスという象徴的な日に預言者としての集団的意志表明を行うための格好の機会であった(Bresci 1994: 56-59)。

MSTMは、「第三世界」一般における飢餓や非識字の撲滅を訴えるだけでなく、各地域社会が抱える「第三世界的」問題や軍政による抑圧についても覚醒を促した。都市部ブエノスアイレスのMSTMグループが、政府のスラム撤去キャンペーンに反対して大統領官邸前に無言で立ちはだかり、

抗議の姿勢を示したのはその一例である (Bresci 1994 : 60–63)。同時に、街頭では MSTM による抗議のビラが配布された。「メリークリスマス！誰のための？」と題されたそのビラには、貧しい人々の暮らしぶりや、スラムの拡大要因が分かりやすい言葉で説明されていた。そこには、首都とブエノスアイレス州だけで80万人もの貧しい人々が社会保障や医療・衛生などから取り残され、失業中であるか低賃金労働を余儀なくされ、栄養失調で死ぬ子供たちもいると記載されていた (“¡Feliz Navidad! ¿Para quién?”, en *Enlace* 3, enero de 1969)。ブエノスアイレスの MSTM の抗議とは、このような社会問題を放置し、美しく発展した都市を造成すべくスラムをつぶしにかかる政府に対するものだった。「我々は政治家、エコノミスト、あるいは社会学者になろうとしているのではない。[中略]しかし、この重大な現状に対して声をあげないのならば、我々はキリスト者として、そして聖職者としての使命をまっとうしないどころか、貧しい人々を搾取する共謀者として捉えられてしまうだろう」(*Enlace* 3, enero de 1969)。このような MSTM の主張と具体的行動は、「反抗的なクリスマス」¹⁰⁾として大々的に報道され、抑圧的で不平等な社会の現実—アルゼンチンにも存在する「第三世界」的問題—を一般の人々にも知らしめ、新たな世論を形成する効果を生みだしていった。

IV MSTM による「政治」の再定義

1 「預言者の使命」と「言葉の政治」

司祭の存在意義の模索は、60年代後半のヨーロッパにおいても、教会権力への異議申し立ての形で行われていた。しかし、MSTM には方向性において大きく異なるところがあった。STM のひとりホルヘ・ベルナツサ (Jorge Vernazza) は、1969年12月にフランスの「交流と対話」(*Echanges et Dialogue : Intercambios y Diálogo*)¹¹⁾グループに宛てた手紙のなかに以下のように記している。「我々もあなた方と同様、聖職者の新しいあり方を模索しています。もっと福音に忠実に、預言者として現実社

会にもっとコミットするために。[中略]しかし、我々の目的はまったく異なるように思われます。我々の目的は、聖職者の地位に終止符を打つことではなく、ラテンアメリカの革命的過程に聖職者として関与することなのです。[中略]ラテンアメリカの民衆にとって、教会像とは、紛れもなく聖職者のイメージや働きによって構築されるものです。聖職者として我々が目指すのは、教会が民衆と同じように革命的な姿勢を持っていることを、彼らに理解してもらうことなのです。[中略][あなたがたの]聖職者の独身制度を廃止するための闘いを否定はしません。しかし我々は、我々の目的を達成するために、教会ヒエラルキーとのあらゆる対立を犯すことを回避したいと考えます」(Enlace 10, junio de 1970:22-23)。このメッセージから明らかなように、運動体としてのMSTMの直接的な目的には、教会権力への反抗は含まれていなかった。

にもかかわらず、MSTMの活動は、カトリック教会中枢や軍政との摩擦を徐々に生んでいった。彼らの目には、MSTMが「政治化」した司祭らの運動と映ったからである。例えば、ブエノスアイレス教区のアランブル大司教は、1969年初めに、聖職者が許可なく政治・経済・社会問題についての発言や行動を行うことを禁じ、間接的にMSTMに対し警告を発している(Pontoriero 1991:45)。STMらは、教会ヒエラルキーの中で与えられた自らの役割遂行の術と、聖職者・一個人として現代世界に生きる意義の模索とのあいだで、板ばさみになっていったのである。¹²⁾

「政治化した司祭たち」との非難を浴びたMSTM内部では、次の『エンラセ』1969年4月号からの引用が示すように、「政治と聖職」をめぐる自問が起きた。「第三世界の問題にかかわる我々の活動は、より現世的な課題を相手にするようになってきた。このような活動を行うなか、我々は聖職者の役割の変化に気づくようになった。このような変化は、我々に新しい疑問を喚起する。[中略]人間の解放やその促進に我々が携わらねばならないということは疑いのない事実である。しかし、これは必然的に『政治を行う』ことを意味するのだろうか。政治とは何か。政治とは権力

に関わる活動である。しかし、聖職をまっとうするということは、権力を放棄するということでもある。それでは、聖職をまっとうするということと、政治に介入するということは両立するのだろうか。聖職者の政治への介入は、いかに正当化され、また要求されるのだろうか」（“Política y pastoral”, abril de 1969, en Bresci 1994 : 67-70）。

MSTM は、政治と聖職の間に存在する矛盾に直面しなければならなくなった。例えば、『エンラセ』5号（1969年5月）の特集「政治—国家と教会、政府と教会ヒエラルキー」では、以下のように政治と信仰の問題が論じられている。「もし信仰というものが、神の意志のもと、人間が他者のためにいかに行動すべきかを問うものであるとするなら、神の民としての教会は『超政治』（Ultra-Política）に行き着くであろう。誰しものが対話と参加がすべての社会の基盤となるべきだと考えるようになった。そして、キリスト教信仰はそれに矛盾しない。なぜならば、対話と参加はキリスト教の本質であるからだ。それは、人間解放のための政治と無縁ではない。

[中略] 聖職者に政治的活動の放棄を迫ることは、その人間としての本性を否定することである。[中略] 教会は、もちろん政党を形成することができない。しかし、我々の信仰から生じる『超政治』とは、人間解放のための一種の政治活動であると言えるかもしれない」（“La política: Estado e Iglesia, gobierno y jerarquía”, en *Enlace* 5, mayo de 1969）。

『エンラセ』7号（1969年10月）には、STMであった神学者ルシーオ・ヘラ（Lucío Gera）の「教会は政治というものに介入すべきか」という論文が掲載されている。ヘラは、「政治やすべての政治的活動は権力にかかわるものである。とすると、教会が直面する問題は次のこととなる。我々は権力を行使し、政治に介入するという使命を持ち合わせているのであろうか」と問題提起し、「権力の行使」や「権力を追求する営み」に教会が関与することを否定する。しかし、教会が現世における救済を促進し社会問題に関心を示すためには、「政治」なるものにかかわる必要がある。そこで、ヘラは「新しい政治」の仕方を提唱する。「政治とは必ずしも権

力の行使を意味しない。それは『言葉』の使用でもある。教会が教えを説き判断を下すことは、声なき民衆の意見を代弁し、民衆の組織化を助ける役割を果たすことになる。しかし、常に言葉の使用によってである。言葉の使用とは、言語を発するだけでなく行動を伴うこともある。しかし、この行動は権力を行使するものではない。これは預言的行為なのである」。よって、「教会は政治に介入すべきである。しかし、それは言葉を発するという意味における政治である」(L. Gera, "La Iglesia debe comprometerse en lo político", en *Enlace* 7, octubre de 1969)。

ヘラは、預言的行為という概念を、profetismo, misión profética, política verbal y testimonial などの言葉で言い換えていく。ヘラによる「預言的行為」としての「新しい政治」の提唱は MSTM 内部で反響を呼んだ。例えば『エンラセ』8号(1969年12月)には「預言的行為」に関する MSTM 書記長ラモンデッティのコラムが掲載され、MSTM の各メンバーにはその是非が問われた。

ラモンデッティによれば、聖書における預言者たちの証言は、抑圧者に対する告発、不公正に対する告発、迫害者に対する告発などを含む。そして、現状に対する告発を行うことこそ、コロンビア・メデジン市で1968年8～9月に開かれたラテンアメリカ司教協議会(CELAM)第2回総会において確認された「預言者の使命」である。ラモンデッティは続ける。「メデジンでの会合の成果は文書にまとめられ、不公正に対し声をあげるよう我々に呼びかけている。しかし、主イエス・キリストの福音が現実のものとなるためには、文書だけでは不十分である。それはラテンアメリカのすべての信者の実践にかかっている。[中略] 主の福音とは、ある歴史的状況を目の前にしたときに主がなされた具体的な行動である。そのような行動をおとりになることによって、主は抑圧者や不公正と対決し迫害された。[中略] その時から、告発者に対する暴力的な仕打ちは、主に従う弟子たちの預言的使命の真正さを証明するしるしとなったのである」(M. Ramondetti, "El Evangelio, Medellin y..nosotros", en *Enlace* 8, diciembre de

1969)。このようにラモンデッティは、不公正に対して声を発し、具体的行動をとることこそが聖職者および教会の正統な使命であると論じた。ラモンデッティによるこの「預言的行為」の解釈は、「具体的行動」の意味するところが必ずしも明確でないとはいえ、抑圧者を恐れず不公正の告発を行うことこそキリスト者の使命であるという意味で、ヘラの「新しい言葉の政治」と重なる。

こうして、MSTMは「政治」の再定義化を図っていった。それは、対話と参加を基盤とする社会を構築するために、福音は人間解放にかかわる使命を持たねばならないという主張であった。そして、その方途として、教会が言葉による「新しい政治」に積極的に介入することが正当化されたのだった。

MSTMの掲げる「新しい政治」は、「第三世界」という言説を戦術的に用いることより、差別され悲惨な現実を甘受せざるをえない人々がアルゼンチンのような豊かな国にも存在するという現実に光を当てた。それは、「制度的暴力」によって搾取され絶望に陥った民衆が「物理的暴力」の行使という最後の手段に訴えることのないよう、MSTMが言葉による「政治」に介入する道を選んだということでもあった。MSTMの訴えは、暴力による国家転覆や権力奪取を容認するものではなく、諸権利を剥奪されている貧しい国々や貧しい人々に、「諸権利を持つ権利」(L.Gera: *Enlace* 7)があることを知らしめようという試みだったと言えるだろう。このように、福音を「預言者の使命」と読み替え、「言葉の政治」という方法を得たことにより、MSTMは、現代世界における聖職者の存在意義を再定義することができたのだった。

2 MSTMの葛藤 ―いかに社会正義を実現するか

MSTM内部での「政治と聖職」論は、その後も続いていく。『エンラセ』9号(1970年3月)には、第3回全国大会(1970年5月)の準備のための会合が1970年3月7～8日にサンタフェ州で行われたとの報告が掲載

されている。注目されるのは、各地方の代表と書記局のあいだで大会の予定議題が話し合われた結果、「政治と聖職の関連と境界」が最重要議題に決定したと報じられている点である（“Invitación al IIIer. Encuentro Nacional”, en *Enlace* 9, marzo de 1970）。1969年4月頃から MSTM 内部でたたかわされていた「政治と聖職」論だが、とりわけ「預言者の使命」における「具体的実践」の意味について MSTM 内部で意見の相違を生んでいたことは想像に難くなく、それゆえに全国大会において議題化されたものと思われる。

サンタフェ州第3回全国大会終了後、書記長ラモンデッティは、その心情を率直に吐露している。「大会へはそれぞれが不安を持ち寄った。不安とは、『3年前に誕生し活動を続けてきた我々の運動には、未だ存在意義があるのだろうか?』ということである。サンタフェから帰って、私の不安は以前にもまして大きくなったと告白しなければならない」（M.Ramondetti, “Reflexiones sobre el Encuentro Nacional”, en *Enlace* 10, junio de 1970: 1）。大会の報告にあたってラモンデッティは、MSTM の現状を一方で評価する。「これまでの大会と比較して、参加者の数が第1回23人、第2回80人、そして第3回113人と飛躍的に増えた」（M.Ramondetti, en *Enlace* 10: 1）。しかし反面、ラモンデッティは、MSTM 誕生の契機となった『第三世界の司教団のメッセージ』への深い共感と、MSTM の実践の意志や方法の關係に不安を覚え始めてもいたようである。「運動の理念と各メンバーの実践を区別する必要がある。[中略]しかし、運動の理念・実践とメンバー一人一人のそれをどのように区別したら良いのだろうか。困難である」（M.Ramondetti, en *Enlace* 10: 1-2）。この発言は、MSTM 内部で「政治と聖職」に関する議論が高まるにつれ、「預言的行為」の解釈、「政治」なるものへの関与の方法などをめぐり、メンバー間に立場や意見の相違が生じていたことを暗示している。

ラモンデッティは、彼とは立場を異にするメンドーサ州の STM ロランド・コンカッティ（Rolando Concatti）が大会での議論をもとに執筆した「預言と政治」（R. Concatti, “Profetismo y política”, en *Enlace* 10, junio de

1970:5-18) という論文について、STM 各自が熟考することを促している。コンカッティはまず、「教会の使命は信者の獲得のみに還元されてしまったようだ」(R.Concatti, en *Enlace* 10:11)、として現状の教会のあり方に疑問を投げかけた。「しかし、我々の時代においては、祭儀や半民主的な制度の強化ではなく、正義・自由・人間を真に人間的なものとするために闘う責任と約束を引き受けることこそ、教会の使命なのである。[中略] それは、聖職者と信者の預言的行為による告発という日常的な闘いによって行われる。[中略] しかし、多くの者を苛立たせ困惑させるのは、この闘いが政治的立場の明言を迫るものなのか否かという点である。[中略] 預言的行為と政治は、一体どこまで同一のものであり、何が異なるのか。それらを区別するものは一体何なのか」(R.Concatti, en *Enlace* 10:11)。このように問題提起したコンカッティは、次にこう宣言する。「預言的行為とは、貧者の救済のためにある。しかし、貧困がどのような無秩序や非人間的な状態を作り出したかを論じ、来世では貧者こそ最初に救済されるとただ述べることに、一体どのような意義があるのか。貧困が大陸・地球規模で拡大している今日、そのようなことを信じる者は、もはやいまい。[中略] 『第三世界』のために真剣に奉仕することは、貧困は政治的産物であると断言することにほかならない。それゆえ、救済・解放の実現は、新しい政治的現実の構築なしには成しえない。[中略] よって、『預言的行為』は決して政治的に中立でありえない」(R.Concatti, en *Enlace* 10:13-14)。こうしてコンカッティは、MSTM が具体的な政治プロジェクトを表明するよう訴えたのである。

MSTM は、教会ヒエラルキーと現実社会との狭間で自己の位置づけを模索するなか、自らが行うべき行為を「新しい政治」と定義し、聖職者の積極的な社会的行動 (*actuación social*) を正当化していった。当然のことながら、「新しい政治」は言葉の戯れから、どのような政治形態が貧者を不平等や貧困から救うのかという極めて現実的な方法論へと移行せざるをえなくなったのである。

V MSTM の終焉

MSTM は国民に向けて公にペロニスモへの支持を訴えた。そして、1973年3月25日に行われた民政移管のための大統領選挙で、ペロンが擁立したカンボラ候補が勝利をおさめると、MSTM はこれを歴史的な「民衆の勝利」と位置づけた。それは、MSTM の衰退と決して無関係でない並行的事象だった。

1973年8月15～17日にコルドバ州で開催された MSTM の第6回全国大会は、全国規模での最後の大会となった。内部対立により大会は紛糾し、MSTM はこの大会をもって実質的に全国規模での活動を停止することになったのである。決裂の原因は、ペロニスモをめぐる STM 間の意見の相違と聖職者の独身制度の是非にあったとされる (“Aporte para el Sexto Encuentro Nacional”, en Bresci 1994:323)。先行研究においては、MSTM の衰退原因は主として前者に求められてきた (Pontoriero 1991:111-113; Brieger 1991:25-26; Touris 2000:51)。後者は、これまで言及はあっても、MSTM の分裂を促した一要因として簡略に叙述されてきたにすぎない (Seisdedos 1999;111-114)。しかし、筆者は、この後者の議論にも注目している。それは、聖職者の独身制度が教会ヒエラルキーに従うことのひとつの象徴であるからである。例えば、ヨーロッパにおける同時期の司祭運動は、運動の目的のひとつに独身制度の廃止を掲げ、その結果多くの司祭が結婚した。彼らにとって独身制度の廃止とは、聖職者の管理装置としての教会組織への反抗を意味したのである (“Echanges et Dialogue”, en *Enlace* 10, junio de 1970:19-22)。この問題は、アルゼンチンにおいても、聖職者と教会の関わり方に深く関係するものであった。独身制度をめぐる議論は、教会ヒエラルキーとの関係を断ち切るのか否かという問題に関わったからである。STM の33%がその後聖職を放棄したという事実 (Martín 1992:15-17) から、MSTM が試みた現代世界における聖職者としての存在意義の模索、すなわち<俗>と<聖>のふたつに分裂した自

己像の再構築は、困難を極める作業だったといえるだろう。

MSTMの全国規模での活動はこの第6回大会で事実上消滅し、その後の活動は人々との共同活動に限定されていく。しかしながら、いくつかのMSTMのグループは1975年秋までMSTMの再統合を模索した。その試みは実を結ぶことなく、1976年3月の軍事クーデターによってMSTM再生の可能性は閉じられた。

日の目を見なかった第7回全国大会の議案書には、MSTMの再定義が登場している（Bresci 1994:341-342）。議案書は、まずMSTMの誕生の契機を明確にしている。「MSTMの誕生および我々の活動に意義を与えたものは以下の2点であり、これらは現在もその意味を失っていない。第1に、バチカン公会議、メデジン司教会議、サン・ミゲルにおけるアルゼンチン司教会議、『第三世界の18人の司教団のメッセージ』などで表明された、教会の新しい経験である。第2に、被抑圧意識を高め、我々に解放の過程への関与を日々駆り立てる民衆との接触だった」。そして、MSTMによる活動の継続が謳われる理由を、以下のように述べている。「信仰のもと、従属と支配という現実を解釈するならば、それは神の意志を否定する罪深い状態である。よって、そこからの解放の闘いに関与することは、主キリストの要求である。[中略] [そのために我々には] 真に民衆とともにあること、民衆に奉仕することが求められる。民衆の貧困、苦しみ、抑圧された状態を分かち合い、[中略] 民衆が解放を実現するための足がかりとなる、意識化、権利の要求、組織化などに居合わせねばならない」

（“Documento de trabajo preparado por los grupos que proponen un nuevo encuentro nacional”, en Bresci 1994:343-350）。ここに見られるのは、MSTMがその誕生から掲げていた諸理念に立ち返ろうという意思である。しかし、そこに立ち返らざるを得なかった点に、5年間にわたるMSTM活動の限界を見ることも不可能ではないだろう。

MSTMの活動は、表象を産出する権力中心—「西洋」—から否定的に言語化された「第三世界」を自らの問題として引き受けることから始まっ

た。それがアルゼンチンの具体的問題に結び付けられるにつれ、新たな社会的現実が視界に浮上し、MSTMは「新しい政治」という政治介入を方法化しようとした。その結果、どのような政治形態が「貧者」を不平等や貧困から救うのかという、極めて現実的・現場的な問題への関与を深めることになった。

MSTMによる「第三世界」の問題化の意義、そしてその限界とは何か。第1の意義は、貧者の立場から豊かさの中で見過ごされていた社会問題を告発し、マクロ的な経済発展を「豊かさ」とみなす開発言説の再考を促した点である。MSTMによる「第三世界アルゼンチン」の文化的自画像の生産は、アルゼンチンの統治エリートの「先進国に近接した中進国」という文化的自画像への異議申し立てであった。

第2に、MSTMが、権力の奪取を目指す旧来の「政治」という概念を、表象・言葉を介しての新しい価値やメッセージの提示を意味する「新しい政治」へと再定義化を図った点を評価すべきだろう。そしてMSTMは、その「新しい政治」という手段と「第三世界」という表象を通じ、「声なきものの声」を政治の場に問題提起した。それは、貧しく抑圧され排除された人々を、温情主義にもとづく一時的な物質的充足で沈黙を強いられる「受動的民衆」としてではなく、「諸権利を持つ権利主体」として再定義する試みであった。

そして、まさしく教会人であることを前提に言葉の政治を方法としたがゆえに、MSTMは、教会組織と現実社会のなかのふたつの自己の統合という困難な根本的問題に解法を与える前に、民衆の勝利という問題に重心をずらしてしまった。そこに、MSTMの限界を指摘することもできよう。

おわりに

本稿では触れなかったが、MSTMとかかわりの深い同時代的テーマは、ペロニスモ、キューバ革命、解放の神学¹³⁾、世界的な68年学生闘争など、少なくない。MSTMとそれらとの関係の精査は、今後の課題である。

1970年代中葉から1990年代初頭にかけて、ラテンアメリカ・東欧・アジアの権威主義体制が民主主義体制へ移行した。地理的連続性のない諸地域だが、体制変動を促した要因のひとつとして、カトリック教会が共通して果たした役割が注目されている。特にラテンアメリカの文脈では、ブラジルとチリの教会が軍政に抵抗し、民主化に最も貢献した例であるとして評価されている（乗1998：144-163）。本稿は、そのさきがけとしてアルゼンチンに誕生した教会人運動 MSTM について、その自己認識運動としての側面に焦点を当てて論じた。その後のアルゼンチンのカトリック教会は、民主化に貢献した教会の対極の例として挙げられることが多い。たとえば、アルゼンチンのカトリック教会は、プロセソ軍政（1976～1983）が犯した人権侵害に対し、事実上の沈黙を守ったと非難されている。軍政と教会のこの共犯関係に対しては、民政移管後、非難の声が後を絶たなかった（cf. Mignone 1986）。

しかし、近年、プロセソ軍政下のアルゼンチンのカトリック聖職者や平信徒を主体とした行事・運動に関する興味深い事例が指摘されている。ネウケン教区¹⁴⁾では、軍政のさなか、1977年から様々な行進（marchas）が行われていた。それらの実践は、クリスマスの「信仰の行進」（Marcha de la Fe）、「尊厳と正義のための行進」（Marcha por la Dignidad y la Justicia）、「命のための行進」（Marcha por la Vida）などと呼ばれた。宗教色と政治色の割合はさまざまだったが、行方不明者の母親や知人が参加したこれらの行進は、後の人権擁護運動の萌芽になったとされている（Mombello 2003 a：149-162）。

カトリック教会と一般市民のこのような共同作業の前史として、MSTM を位置づけることも可能だろう。人々とともにあることを目指した STM は、まさにその身体をもって人々とかわり、その姿勢は人々の記憶に深く刻印されることとなった。それは、21世紀の新しい草の根的な神父・修道女たちの活動に根拠を与えるものともなっている（cf. Mallinaci 2000）。

*Agradecimiento al CIAS (Centro de Investigación y Acción Social) de Buenos Aires. Particularmente a los padres Juan Luis Moyano, s.j., Enrique Fabbri, s.j. y José María Meisegeier, s.j. que me permitieron acceder a las fuentes primarias sobre el MSTM y a las bibliografías de la época tratada. Asimismo deseo expresar mi gratitud a la bibliotecaria de la misma institución María Teresa Ghiglione que me aportó su gentil colaboración y cariño.

註

- 1) この運動は、司教集団が形成する上部の教会ヒエラルキーと、各教会・教区という下部組織のあいだの中間的組織体という性格をもった。そして、司祭クラスの聖職者のアソシエーションとして全国レベルの機能を果たした。このような全国レベルの中間組織は、アルゼンチン教会史上それまでにないものであった。最盛期にはアルゼンチンの全聖職者の約10% (教区司祭に限定するならば約15%) の司祭が参加したという。(Martín 1992: 11-15)。MSTM は、中央がすべての活動方針を決定するトップダウン型ではなく、各地域が独自に活動するネットワーク型の組織構造を採用した。それは、地域が抱える問題に対応すべく現場の司祭らが具体的活動を行うというこの運動の目的を達成するためであった。このように、MSTM がその当初から柔軟な組織構造を取り、最後まで組織的に一枚岩であろうとしなかったことが、運動を衰退させていく要因のひとつになったとも指摘されている (Martin 1992: 26-29)。ネットワーク型組織は危機に強いとされるが、もともと堅固なヒエラルキー構造をもつ教会組織にネットワーク型運動を持ち込むこと自体が困難を内包していたと言えるだろう。
- 2) 先行研究において MSTM は、①第二バチカン公会議後に生じたカトリック教会刷新派 (Seisdedos 1999; Touris 2000)、②エスタブリッシュメントと癒着する「オフィシャルな」教会に対抗する人民教会 (Dri 1989)、③軍政によって政治的参加の回路が閉ざされるなか生じた代替的異議申し立て運動 (Pontoriero 1991)、として論じられてきた。
- 3) 本稿において MSTM の存続期間は、第1回全国大会 (1968年5月) から第6回全国大会 (1973年8月) までとする。これは、アルゼンチン全土規模での MSTM の活動期間を示すものである。しかし、MSTM 誕生の胎動は1967年末に始まった。また、第6回全国大会紛糾後も各地域の STM は活動を続け、1975年末まで MSTM 再組織化の動きがあったことも付記したい。
- 4) 「我々にとってエンラセとは何を意味するのか。エンラセ [=スペイン語で紐帯の意] という名称の通り、『第三世界の18人の司教団のメッセージ』

に連帯を表明した司祭たちを結ぶるしである」(*Enlace* 1, septiembre de 1967)。MSTMの機関紙であった『エンラセ』は、ガリ版印刷で1968年9月から1973年6月にかけて全28号が発行された。1～9号にはページ番号が記されていないので、本稿においてそれらの号から引用を行う場合は、号数と記事名を表記する。本論文は、この一次資料『エンラセ』と、元STMのドミンゴ・ブレシによって編集された資料集(Bresci 1994)をもとに、MSTMの言説を分析するものである。『エンラセ』を利用した先行研究として、マルティン(1992)は、MSTMと社会諸セクターの間に生じていた齟齬の原因解明を中心課題とし、MSTMの思想を多角的に分析した。その研究は、MSTMの実体論的研究を大きく進展させたと評価できる。

- 5) 18人の司教の所属は、ブラジル(9名)、アルジェリア(1名)、オセアニア(1名)、エジプト(1名)、コロンビア(1名)、ユーゴスラビア(1名)、レバノン(1名)、中国(1名)、ラオス(1名)、インドネシア(1名)の教区であった。署名の筆頭者は、ブラジルのオリンダ・レシフェ教区のエルデル・カマラ大司教だった。
- 6) この手紙の内容から推測されることは、第1に、この日付以前に既に司祭たちの交流が各地域・地方に存在していたこと、第2に、この司祭たちの連絡網を介して、当初200名強の署名が集まることが期待されていたことである(Archivo del CIAS)。このネットワークなくして『メッセージ』が短期間に流通することはなかっただろう。
- 7) 文化的自画像とは、「歴史状況のなかで外部との関係性において自己に投影するイメージ」である。世界の被支配者文化においては、しばしば、外部の支配的な視線との相関において自己表象が行われるといったジレンマがみられる(落合1996; 1998)。
- 8) 1963年から1973年の間、アルゼンチンの一人当たり生産高は先進諸国をしのご勢いで増加し、国内総生産も年6.7%の伸びを記録した。特に、ラテンアメリカという文脈でそれを解釈してみると、当時のアルゼンチンはブラジルと並んで最も「進んだ」「豊かな」国であったといえるだろう(Gerchunoff y Llach 1998: pp.309-313)。
- 9) 従軍司教グループは、教会内の「体制転覆勢力」とみられるMSTMについての報告を一冊の本にまとめた。この本に日付はないが、その内容から1971年5月から8月の間に書かれたものであることが推測される(Archivo del CIAS)。
- 10) MSTMにとってこの「クリスマスの反抗」は、「クリスマスの約束」という預言的行為であった。これに対し、飢餓のないアルゼンチンでMSTMが飢餓を告発し、抗議の断食を行うことを滑稽とする記事を掲載した雑誌もあつ

た (“La Iglesia católica : La Navidad rebelde”, en *Primera Plana*, No. 314, 31 de diciembre de 1968 : 12–14)。

- 11) 1968年の五月革命後に誕生した「交流と対話」グループには、フランスとベルギーの800人の聖職者が参加していた。彼らは、人間解放のための社会闘争の一環として、教会の権威主義的な支配構造からの聖職者の解放を主張した。MSTM が聖職者として社会問題へ関与することに自己の存在意義を見出したのに対し、「交流と対話」グループは、教会内部の組織改革に関心を示していたといえる (“Echanges et Dialogue”, en *Enlace* 10, junio de 1970 : 19–22)。
- 12) 教会と MSTM の対立は、1970年8月に一部の教会ヒエラルキーからなる常任委員会 (Comisión Permanente) が公に MSTM を「体制転覆勢力」であるとして名指しで論難したことによって顕在化した。MSTM は常任委員会への応答を『我々の熟考』(*Nuestra Reflexión*) と題された一冊の本にまとめた。MSTM は常任委員会へ対話を求めたが、委員会から反応はなかった (Bresci 1994 : 109–162)。
- 13) MSTM は、後に神学的一潮流となる「解放の神学」誕生以前に存在した実践レベルの司祭運動であった。ラテンアメリカ諸国の類似の聖職者運動 (例えば、コロンビアの Golconda、ペルーの ONIS、チリの Cristianos por el Socialismo) のなかで、MSTM の誕生は最も早かった。神学的次元において、アルゼンチンの聖職者たちが「解放の神学」を「左翼的」あるいは「マルクス主義的」であると批判した (Palacios Videla 1987 ; cf. Di Stéfano y Zanatta 2000 : 535–541) ことも特記されるべきであろう。
- 14) ネウケン教区のハイメ・デ・ネバーレス司教 (Mons. Jaime De Nevares, Obispo de Neuquén) は、プロセソ軍政期 (1976~1983) や民政移管後のみならず、アルゼンチン社会が最も先鋭化していた1960~70年代の軍政期にも積極的に社会的発言を行った。例えば、ネウケン州では1970年に「チョコナーソ」(el Choconazo) といわれるダム建設労働者たちのストライキが起り、STM らが争議に積極的に関与した。司教は労働者と司祭らを公然と支持し、当時のオンガニーア軍政と対立した (Mombello 2003 b : 218 ; *Enlace* 9, marzo de 1970)。司教は、民政移管後の1984年に、当時のアルフォンシン大統領によって CONADEP への参加を要請された。

参考文献

- 落合一泰. 1996. 「文化間性差, 先住民文化, ディスタンクション」(『民族学研究』61巻1号)、52-80ページ。
- . 1998. 「<メキシコ的なもの>の視覚化とその背後」(『一橋論叢』

- 第120巻第4号)、516-537ページ。
- グティエレス、グスタボ、2000.『解放の神学』岩波書店。
- シャルチエ、ロジェ、1992.「表象としての世界」(『思想』No.812)、5-28ページ。
- セルトー、ミシェル・ド、2002.『日常実践のポイエティック』国文社。
- 遅塚忠躬、1996.「言説分析と言語論的転回」(『現代史研究』42号)、39-52ページ。
- 藤田富雄、1990.「中南米の宗教と民衆運動」(『国家と革命』シリーズ世界史への問い10 岩波書店)、223-249ページ。
- 二宮宏之編、1995.『結びあうかたち』山川出版社。
- 松下洋、1987.『ペロニズム・権威主義と従属—ラテンアメリカの政治外交研究』有信堂。
- 乗浩子、1998.『宗教と政治変動—ラテンアメリカのカトリック教会を中心に』有信堂。
- Aroskind, Ricardo.2003."El país del desarrollo posible", en Daniel James(dir.), pp.63-116.
- Auyero, Javier y Rodrigo Hobert. 2003. "¿Y esto es Buenos Aires? Los contrastes del proceso de urbanización", en Daniel James (dir.), pp.213-244.
- Bellota, Araceli. 1997. "El cura de las villas", en *Todo es Historia*, No. 361, pp. 8-26.
- Bresci, Domingo. 1994. *Movimiento de sacerdotes para el tercer mundo : Documentos para la Memoria Histórica* (Buenos Aires : Comisión de Estudios de Historia de la Iglesia en Latinoamérica).
- Brieger, Pedro. 1991. "Sacerdotes para el tercer mundo. Una frustrada experiencia de evangelización", en *Todo es Historia*, No.287, pp.10-41.
- Castagno, Antonio. 1971. *Tendencias y grupos políticos en la realidad argentina* (Buenos Aires : EUDEBA).
- CIAS (Centro de Investigación y de Acción Social, Buenos Aires).
- De Liz, Liliana. 2000. *Política en suspenso 1966/1976* (Buenos Aires : Paidós).
- Di Stefano, Roberto y Loris Zanatta. 2000. *Historia de la Iglesia en la Argentina* (Buenos Aires : Grijalbo).
- Dri, Rubén. 1987. *La Iglesia que nace del pueblo* (Buenos Aires : Ed. Nueva América).
- Escobar, Arturo. 1994. *Encountering development* (Princeton, New Jersey : Princeton University Press).
- Gera, Lucío et al. 1967. *La Iglesia y el país* (9 de Julio, Buenos Aires : Ed. Búsqueda).

- Gerchunoff, Pablo y Lucas Llach. 1998. *El ciclo de la ilusión y el desencanto* (Buenos Aires : Ariel).
- James, Daniel (dir.). 2003. *Nueva Historia Argentina Tomo IX* (Buenos Aires : Sudamericana).
- Mallimaci, Fortunato. 2000. "El catolicismo argentino en la vida democrática", en *Todo es Historia*, No.401, pp.70-80.
- Martín, José Pablo. 1992. *Movimiento de sacerdotes para el tercer mundo. Un debate argentino* (Buenos Aires : Guadalupe).
- Mignone, Emilio. 1987. *Iglesia y Dictadura* (Buenos Aires : Ediciones del pensamiento nacional). <http://www.nuncamas.org/investig/investig.htm>
- Mombello, Laura Cecilia. 2003 a. "Neuquén, la memoria peregrina", en Elizabeth Jelin y Victoria Langland (comps.), *Monumentos, memoriales y marcas territoriales* (Buenos Aires : Siglo Veintiuno), pp.149-163.
- . 2003 b. "La capital de los Derechos Humanos", en Ponciano del Pino y Elizabeth Jelin (comps.), *Luchas locales, comunidades e identidades* (Buenos Aires : Siglo Veintiuno), pp.209-232.
- MSTM (El Movimiento de Sacerdotes para el Tercer Mundo). Entre septiembre de 1968 y junio de 1973. *Enlace* (boletín del MSTM), 28 números.
- . Sin fecha. *¿Qué son los sacerdotes del Tercer Mundo?*
- Palacios Videla, Ignacio. 1987. "El contexto histórico de la teología de la liberación", en *Todo es Historia*, No.238, pp.79-95.
- Podalsky, Laura. 2004. *Specular City. Transforming culture, consumption, and space in Buenos Aires, 1955-1973* (Philadelphia, Temple University Press).
- Pontoriero, Gustavo. 1991. *Sacerdotes para el tercer mundo*, Tomo I y II (Buenos Aires : CEAL).
- Pujol, Sergio A. 2003. "Rebeldes y modernos. Una cultura de los jóvenes", en Daniel James (dir.), pp.281-328.
- Romero, Luis Alberto. 2001. *Breve historia contemporánea de la Argentina*, (Buenos Aires : FCE de Argentina).
- Segundo, Juan Luis et al. 1969. *Iglesia latinoamericana, ¿protesta o profecía?* (Avellaneda, Buenos Aires : Ed. Busqueda).
- Seisdedos, Gabriel. 1999. *Hasta los oídos de Dios. La historia de los sacerdotes para el Tercer Mundo* (Buenos Aires : Ed. San Pablo).
- Touris, Claudia. 2000. "Ideas, prácticas y disputas en una Iglesia renovada", en *Todo es Historia*, No.401, pp.44-60.